夫婦の会話　―言語運用の意識と実際―[1)]

川　崎　晶　子

1．はじめに

本研究の目的は、配偶者に対する待遇意識と実際の発話の記録から、日本語の夫婦間で話されることば、「夫婦語」の特徴を明らかにすることである。

「夫婦語」というように、会話を一定の人間関係ごとにとらえて研究することは、比嘉（1982）によって提唱された。我々は、親子、夫婦、師弟などさまざまな人間関係を持って生活している。そしてその人間関係の間で交わされる会話には、同一言語における異種・変種とでも言うべき親子語、夫婦語、師弟語などが用いられていると言える。そしてそれらの語は、人間関係をふまえた社会・文化的な言語運用の規則により使われている。言語運用の実際を見ようというとき、この一定の人間関係を規定することは不可欠である。そして、さまざまな人間関係で使われることばの社会・文化的運用規則が明らかになることにより、その言語の特徴、機能が明らかになる。一方、親子、夫婦などの人間関係はどの言語の社会でも普遍的に存在する。従って、一定の人間関係の会話をさまざまな言語で研究し、比較することにより、言語の普遍的／個別的機能の解明が可能になる。

本研究は、上記の理論を実証する第１歩としての意義がある。

本研究の第２の意義は、テープに録音し、文字化し、コンピューターに入れてある発話の記録と、面接調査による意識調査の２つを資料とすることである。特に実際の発話の全記録は多くはなく、その分析となると非常に少ない。

2．資　　料

本研究は、東京在住のＫ夫妻を分析対象とする。Ｋ夫妻の家族構成は、下記の通りである。

Ｋ夫　　50才　　東京生まれ、サラリーマン。
Ｋ妻　　49才　　東京生まれ、主婦。
Ｋ長女　22才　　東京生まれ、私立大学生。
Ｋ次女　18才　　東京生まれ、私立高校生。

資料としては、１）敬語意識の面接調査、２）主婦の１週間調査、という意識調査と発話の記録の中からＫ夫妻の部分を使用する。以下に１）２）の概要を述べる。

2．1　敬語意識の面接調査

日常接する人やことばにどういう丁寧さを感じ、またどういうことばづかいをしているかを聞くものである。1（最も気楽な）から5（最も改まった）の5段階の丁寧さの尺度[2]を用い、下記の4種の調査を行った。

1）日常接する人15人の5段階評価。

2）「いつ行くか」を聞く時使用する表現の5段階評価。

3）1）の人々に対しての「いつ行くか」を聞く時の表現。

4）1）の人々に対して、与えられた場面でどう行動するか、行動の選択（例：どこかに一緒にいく時間を決める時どうしますか、A、B、Cの中から選んで下さい。A．相手に自分の都合に合わせてもらう。B．2人で話し合って都合のよい時間にする。C．相手に自分の都合を合わせる。）。

2．2．主婦の1週間調査

主婦のいろいろな場面での実際の発話を記録し、分析するものである。発話の記録は、下記の手順で作られた。

1）K妻の1週間の中の10時間をテープに収録。（登場人物50人）

収録場面

場面1　デパートや銀行などへの外出。

場面2　訪問客と家族の会話。

場面3　朝の会話。

場面4　電話ーPTAの観劇会について。

場面5　電話ー娘のピアノの発表会について、その他。

場面6　料理教室。

場面7　日曜日の家族の会話。

場面8　夫帰宅後の夫婦の会話。

2）文字化（漢字かな混り文）

3）トピック切り、分ち書きのための単位切り及び発話[3]ごとの聞き手決定。

4）文番号、場面番号、トピック番号、話者記号、聞き手記号が発話ごとに付くようにし、かたかな分ち書きでコンピューター[4]に入力。（13285発話）

5）KWIC[5]（文脈付50音順語のリスト）作成。（延べ語数約8万語）

3．配偶者の待遇意識

3．1．配偶者とは

面接調査によると、妻は夫を、夫は妻を、「1．最も気楽な気持ちで接する人」と言い、「同じ方向に自分よりゆっくり歩いている相手の後姿に気づいたら」「小走りに歩いて追いつき声をかける」と言っている。一方「戸口で鉢合わせした時」妻は「自分が後に下って道をゆずる」と言い、夫は「相手がゆずる事が多い」と言い、「相手と一緒にいる時、地震、雷、稲妻、毛虫など、自分のこわいものに出合った場合」、妻は「思わず声をあげてこわい気持ちを隠さない」と言い、夫は「相手を安心させるような言動をする」と言っている。

K夫妻は、気楽で、親しい仲であり、妻は夫をたて、また頼りにしており、夫はそれを受け、たのもしく、また偉丈夫に振舞っているという意識があるようである。

3．2．配偶者に対することばづかい意識

3．2．1．一般概念

比嘉は日英比較の観点から「日本人のこれまでの伝統的で常識的な夫婦語では、一般に夫は妻を『おまえ』と呼ぶが、妻は夫を『あなた』と呼び…夫は妻の名称を『花子』のように呼び捨てにするが、妻は夫を『太郎さん』のように『さん付け』で呼んでいる。次に夫は妻に対して妻を目下と見なした言葉遣いをするが、妻は夫に対していわゆる敬語あるいはていねい語を使っている」（1982：91）と述べている。このように、一般に夫婦間のことばづかいに関して「夫は妻にぞんざいな、妻は夫に丁寧なことばを使う」という概念がある。

3．2．2．荻野の調査

男女の配偶者に対することばづかい意識の違いは荻野の調査報告（1982）にも見ることができる。以下に荻野の調査概要を示す。

調査者：東京大学言語学研究室有志

調査地：東京都文京区根津・西片地区

被調査者：夫婦がそろっている世帯の中学生以上

調査達成数：488人（男210人、女278人）

調査内容：与えられた場面でどういう言い方をするかを17項目の相手について聞く。（例、「どこそこの電話番号を知っているか」とたずねられて「知っている」と答えるときの言い方ですが、「知っている」というところを、同じ年ごろの親しい友人にはどう言いますか」「｛おくさん／ご主人｝にはどう言いますか」）

荻野は、上記の面接調査の結果から、聞き手の待遇レベル（聞き手に対すること

ばづかいの丁寧さの程度）の数量化を行った。そしてそれを男女別に比較した結果１）全体に（すべての人に対して）女性の方が男性よりもことばづかいが丁寧であり、２）配偶者に対しては「夫は妻に対して最もぞんざいなことばづかいをするのに、妻は夫に対してそれほどぞんざいなことばづかいはしない。少くとも女性は夫を両親や親しい人よりも上位に位置づけている」ということが明らかになった。

荻野の調査は、場面と人物を想定してどう言うかを答えさせるもので、日常話している実際のことばとどの程度一致しているかは不明である。しかし、上述のような、男女が異なったことばづかい意識を持っていることは確かで、前述の一般概念を証明するものである。

３．２．３．Ｋ夫妻の場合

面接調査では、Ｋ夫妻に日常接する人々に「いついくか」を聞く時どう言うかを尋ねている。それによると、夫は妻に「イツイクノカイ」と言い、妻は夫に「イツイラッシャル？」あるいは「イツイキマス？」と言うと言っている。

妻は、子供には「イツイクノ」、２才上の実姉や５才上の実兄には「イツイク？」と言うと言っており、夫に対しては、子供や兄弟には使わない、丁寧語や尊敬語を含む丁寧なことばづかいをするといっている。

夫は、「イツイク」という最もぞんざいなことばは同僚や友人に使い、妻にはそれを少し和らげた「イツイクノカイ」を使うと言っている。

Ｋ夫妻の場合、夫は、荻野のいうように妻に最もぞんざいな話し方をしているわけではない。しかし表現の形式を比較すると、妻のことばづかいの方が夫のそれより丁寧である。

４．夫婦の会話の実際

実際の発話の記録に見られる夫婦の会話の特徴を、１．呼称・二人称詞、２．トピック、３．会話の進行、４．丁寧語、の４点に焦点を当てて述べることにする。丁寧語に関しては、意識と実際のずれという点に注目してみたい。

４．１．呼称・二人称詞

夫婦間で使われた呼称、二人称詞を場面ごとにまとめると表１のようになる。（　）内は出現数である。

表1　場面による呼称・二人称詞の用法

	妻 → 夫		夫 → 妻	
場面8　夫帰宅後の夫婦の会話	アナタ	(43)	オマエ	(1)
			キミ	(1)
場面7　日曜日の家族の会話	アナタ	(10)	キミ	(1)
	オトウサマ	(3)		
場面2　訪問客と家族の会話	アナタ	(5)		
	オトウサマ	(5)		

夫婦が2人だけで会話をしている時は、妻は夫に「アナタ」を使い、夫は妻に、「オマエ」か「キミ」を使っている。娘や娘関係の客が会話に加わると、妻は「アナタ」の他に「オトウサマ」も使う。今回の資料の中には、固有名詞（＋サン）の例はなかった。

K夫妻の呼称・二人称詞の特徴は、妻→夫が極端に多いことと、オトウサマの用法に見られる。

井出（1979）によると、大学生の男女の会話での呼称と二人称詞の出現数は4000発話中男性が51回と174回、女性が19回と39回で、女の方が圧倒的に少ないという結果である。その理由としては、女は相手に直面する話し方を避ける傾向にあることがあげられている。今回の夫婦の会話では、呼称・二人称詞の出現数は妻が圧倒的に多い。主婦は日常生活のペース作りを一手に引き受けているので必然的に家族の1人1人に対する態度がはっきりし、呼称・二人称詞がふえていると思われる。

「オトウサマ」は来客中に多く使われている。一方この資料の中では夫が妻に、「オカアサマ」や「オカアサン」は使っていない。来客中の「オトウサマ」の増加は、娘の先生である客が娘中心の物の見方で「オトウサマ」を連発しているのにつられて使うようになったということと、夫を父親としてたてることにより自分を従順な妻に演出することが考えられる。後者の「オトウサマ」は妻にとって、装いのことばと考えられる。

4．2．トピック

トピックの切れ目を決めることはとかくむずかしいが、場面8ではクーラーの冷え具合の話をしていたのに急に貝をむいてくれた話に変るなど、トピックが全く違うものに気軽に変る事が多く、区切りやすかった。1つの話題が終ったり、全く別の話題の出現によって中断されるまでを1トピックとして、場面8の夫帰宅後の夫婦の会話を見てみると、73トピックある。そのトピックは大別して表2のよう

な７つに分類できる。

表２　場面８のトピックと第１発話者

トピック分類	例	トピック数	第１発話者	
			妻	夫
１．あいさつ	ごくろうさまでした	1	1	0
２．日常生活行動に付随するもの	食事する？風呂わいた クーラーつけるな	15	13	2
３．日常的事柄に関する雑談	天候、娘の外出 仕事の忙しさ	26	15	11
４．その日起った事	Ｙさんの来訪	8	3	5
５．自らの体験談	交通事故目撃	4	4	0
６．世間話	隣りの空家	18	12	6
７．他	不明	1	0	1
計		73	48	25

１、２、３は、発話数が少ない。２は食事の仕度をしながらとか、風呂がわいたなどのような物理的な理由により突然どこにでも割り込んでいけるもので、１発話のみというのもある。３は、話の内容を伝えるというよりは、話をする行為そのものが人間関係をうまく保つ為に意義があると思えるようなものである。４は突然思い出したように始るトピックであるが、聞き手にとっては新しい情報なので、片方が一方的に話し、聞き手は相づちやちょっとした質問のみをはさむことが多い。５は、何かのきっかけで昔の印象的体験などを話し始めたもので、話者は多少なりとも興奮していて、感情移入のある発話が多い。６はいろいろな人が登場し、直接話法と「～デスッテ」という報告調でどんどん話が展開していき、２人が知っている情報を出し合って話を進めているという感じの会話が多い。７は、テープがよく聞き取れなかったものである。

日常の夫婦の会話というのは、議論を戦わせたり、どちらかがどちらかを説得しようとしたりという激しい会話は少なく、面と向ってというよりは何かをしながらの表面的な会話が多いのではないかと思う。場面８も、テープがまわっているためにやや積極的に話しをしている感じがしないでもないが、サラッとした典型的な夫婦の会話のような気がする。そこでは、行動に付随しているトピックが各所にはさまれながら、日常的事柄に関する雑談や世間話が気軽にトピックを変えながら出てきている。

4．3．会話の進行

井出（1979）によると、男女の学生の会話では、男子学生が会話をリードし、積極的に発言し、女子学生はそれを支持する側にまわる傾向があるという。夫婦の会話ではどうであろうか。会話のリードの様子を1．話題の交換、2．相づち、3．会話の先取り・合作の3点に焦点をあてて見てみることにする。

4．3．1．話題の変換

場面8の72のトピックの第1発話の話者、話題の変換者を見ていくと、表2の右側のようになる。

表2を見てわかるように、妻が話題を変える機会は夫の2倍ある。日常生活行動に関しては妻が主導権を握っているので妻の率が多いのはあたりまえだが、世間話でも、体験談でも妻の率が大きい。話題を変えるということは、会話の方向づけをしているということで、妻のペースで会話は進んでいくことになっているのである。

4．3．2．相づち

「ウン」「ウンウン」「フーン」「エエ」などの非常に短い発話で、相手の話に調子を合わせる相づちは、場面8で妻60回、夫180回あり、圧倒的に夫の方が多い。妻のはじめたトピックでは夫の相づちが多く、夫のはじめたトピックでは妻の相づちが多く含まれるが、後者の場合で途中で妻が話の主導権を取り返し夫が相づちをうつ側に立つという例がけっこう多く、それで夫の相づちが妻の3倍という結果になったようである。

井出（1979）の大学生の男女の会話の分析では、相づちは男子学生が76／1000回、女子学生が124／1000回で、女子の方が多く、男子学生が会話をリードし、女子学生が相手の発話を支持する傾向があるという結果がでている。同じ男女でも夫婦となると全く逆である。

今回はK夫妻の発話のみをとり上げており、K夫妻のパーソナリティーにより上記のような結果がでてきているという可能性もある。しかし内容を読んでいくと、K氏は寡黙で「ウム、ウム」とうなづくばかりの人というわけでは決してない。逆にK氏はかなりおしゃべりだという印象を受けるくらいである。トピック変換や相づちの夫婦による量の差は、やはり、夫婦の会話における役割りの差、妻は疲れて帰宅したであろう夫に対し和やかな雰囲気作りにさまざまな軽い話題を持ち出し、夫はそれに反論したりせず軽く受け入れるというところから出発していると思われる。それを検証するためには、今後何組かの夫婦の会話の分析が必要である。

4．3．3．先取り・合作

会話には、相手の発話が完了しないうちに自分の発話を入れてしまうことがしば

しばある。「さえぎり」や「重ね発話」がその典型であるが、今回の資料では相手の発話が終らないうちに、相手のいいたいことを先取りして自分が言ってしまう積極的な会話の中断が目についた。これを「先取り・合作」と呼ぶことにする。

場面８では、この先取り・合作が３ヶ所あり、皆妻が行っている。妻は夫のいいたいことを先取りし、夫の発話に自分の発話をつけてしまう。妻はこの時点で、聞き手から積極的会話参加者となり、会話のテンポを早めたり、流れを変えたりしている。

以上、３点を見ると、どれも妻が会話のリードをすることが多いことを証明するものである。男のことば、女のことばという研究方法があるが、女でも女子学生が学生間で使うことばの場合と妻が夫婦間で使うことばの場合がこれほど違う。一定の人間関係での役割りがそうさせているように思える。

４．４．丁寧語

４．４．１．「デス」「マス」の出現率

Ｂ：ウン
Ａ：ダカラ　シュンカン　ヨコ　トオリスギル　ダケ　コウ　フニ　ミタ　ン
　　ダ　ケド　ネ
Ｂ：ウン
⋮
Ａ：…ナンカ　ハナス　コト　アッタ　ノニト　オモッテ　タ
Ｂ：ウン
Ａ：デ　ソノ　ハナシヲ　シヨウト　オモッタラ　ネ　イマ　オモイ　ダシタ
　　ダカラ　ソノ　ヒ　シンブン　ミヨウト　オモッテ　ワスレテ　サア。
Ｂ．マ　ショウショウノ　ジコ　ジャ　イマ　デナイ　カラ　ネ　ヨホドノ　コ
　　トガ　ナイ　カギリ　ネ　(801,030) [6]

これはＫ夫妻の会話である。Ａが妻、Ｂが夫で、場面８、夫帰宅後の夫婦の会話のトピック５、交通事故目撃の話の一部である。丁寧語は全くなく、どちらが妻か夫か、差はほとんどない。このような会話は今回の資料の中にけして少くはない。

意識調査では、妻は夫に「イツイキマス？」「イツイラッシャル？」と聞くと言っている。「イラッシャル類（イラッシャイマシタカ～イラッシャンノ）を、妻は158回使っているが、夫に対して、夫を主語にして使っているものは１回もない。「イキマス？」の例はだれに対しても１回もなく、「イクカ」を聞く時は妻は夫に対して「イクワケ」(801,004) というのが１つあった。夫から妻へは「～カ？」や「～ダロ？」が主で「～カイ」を含む文は２回のみである。実際の発話では、妻は常に美化語が多いことは確かだが、夫に対する丁寧語や尊敬語はほとんど出て

こない。

今回の発話の記録は、限られた場面の限られた話題の発話の記録であるので、ある語の例がないことが即使わないということではない。そこで、もう少し一般化し、典型的な丁寧語「デス」と「マス」の出現率を見てみよう。

妻は全発話中「マス」を645回使っているが、その中で場面8で使ったものは8回、そのうち1回は直接話法で他人の発話の真似をしているので、7回、1％のみである。「デス」は全発話中743回使っているが、場面8では49回、その中で直接話法15回をのぞくと34回、4.6％のみである。夫は場面8では「デス」も「マス」も1回も使っていない。場面8、夫帰宅後の夫婦の会話は、他の場面に比べ圧倒的に「デス」「マス」の少ない会話である。

4．4．2．「デス・マス」の使われる時

「デス」や「マス」をいつ使うかということは、1．場面（夫婦の他に誰かいるか）、2．話題（何について話しているか）、3．発話の種類（物を頼む、報告するなど）、4．周囲の敬語の引力、5．発話者の心理状態などが関係していると考えられる。発話の記録の側からその要因を検討したい。

4．4．2．1．場面

夫婦間、家族間では夫婦は「デス」も「マス」もない非常にくだけた話し方をしていることが多い。そこに来客が入ると、それだけで、妻から夫への発話が丁寧になることがある。

場面2．来客時の1983発話の中で、うなづきやあいの手の短い発話をぬかした夫婦の会話を取り出すと、妻21発話、夫18発話ある。その中で妻の発話の半数と夫の発話のすべてが、

夫：ヨジ　オキ　ダ　ヨ　ネ　ダイタイ

妻：ヨジ　ナラ　イイ　ホウ　ヨ

というように、いつものくだけた調子である。しかし、残りの妻の半数の10発話は

妻：ジャ　オトウサマ　オソウメン　オソウメン　ノビナイ　ウチニ　メシアガッテ　クダサイ

妻：オトウサマハ　アンマリ　オクチニ　アワナイ

などのように、丁寧なものである。夫という身内の者に対して、他人の前で敬語を使っているのである。

来客を交えた会話は、非常に丁寧なことばづかいをお互いにして進んでいる。そこにくだけた調子の発話がまぎれ込むと、来客に対する親しい態度より、夫婦間の親密度の方が強調されてしまう。丁寧な、気取ったような調子を続けていた方が会話の流れを乱さず、訪問者中心の会話であるということを示しつづけることができる。夫に対してまで丁寧語を使用するのは、1つには上記のような来訪者に対する

思いやりのあらわれのように思う。

もう1つの理由は、夫を上に待遇する表現を使うことによって、妻は自らを従順な妻に位置づけて見せることができる。自己の美化のために丁寧なことばづかいをするのである。

4．4．2．2．トピック

話し手、聞き手が同じ人であっても、話題が変ることによって敬語が使われるようになるということはある。OKUDA（1977）によると年令が1才違う女子の大学院生の会話で、話題が年上の方の体験談になると、年下は「デス・マス」を使うようになり、他の話題だと「デス・マス」が消えるという例がある。

夫婦の場合も、話題によって、妻は夫に従うものだというような意識、あるいは態度が要求され、妻のことばに丁寧語が出現する可能性があるのではないだろうか。

場面8の73のトピックの中で、直接話法以外で「デス・マス」の使われているものをぬきだすと、27トピックある。トピック分類別に見ると、1：1/1（トピック分類1では総トピック数1の中で「デス・マス」を含むトピックは1つあるの意）、2：6/15、3：8/26、4：4/8、5：0/4、6：7/18、7：1/1である。

「デス・マス」の含まれているトピックと言っても、数十発話の中に1回しか含まれていなかったり、1発話が1トピックでそれに「デス・マス」が含まれていたりとまちまちである。トピックとの関連は自分の体験を話す時は「デス・マス」を使わないということがかろうじて言えるだけのようである。

4．4．2．3．発話の種類、周囲の敬語の引力話者の心理

「デス・マス」が使われる時の説明はトピックでは不充分であった。「デス・マス」の付いている文だけをもう少しくわしく見ていくと、何らかの共通点があることに気がついた。それを下に列挙する。

1）毎日のように聞いている日常生活行動

eg．オフロガ　ワイテ　マス　ケド？

　　アト　デス　カ？

2）今日した事、家族のことなどについて夫から聞かれて答える時

eg．スミ　マシタ

　　ヤリ　マシタ

3）よそから聞いたことを報告する時

eg．ソレヲ　キョウ　トリニ　イラシタン　デスッテ

4）相手に対して不服がある時

eg．夫：アレハ　ソウトウ　アイテ　ル　ン　ダ　ヨ　アレ

　　妻：ソウ　デス　カ

　　夫：ウン

妻：デモ　ナンカ　シメルトキ

1）や2）の時は、会話の中で急に「世話係」とか「留守をあづかる者」という立場を一種の気取りのような形で強調する雰囲気になった時でてくる表現ではないかと思う。テキパキとした働き者の妻のイメージが「デス」や「マス」に込められている。

3）の「デスッテ」は口ぐせのようにも聞こえるが、例のように話していることの中に他人が登場し、その他人に対して「イラシタ」というような敬語を使用すると、それにつられて「デスッテ」がでてくるようである。

この話題の中の人に対する敬語は、夫はあまり使わず、妻は非常に良く使う。次のような会話が成り立ってしまうほど顕著である。

夫：ジャア　ソノ　オトウサンガ　シンダ　ン　ジャ　ジャア　ショッチュウ　ミニ　クル　ワケ　ニ　イカ　ネエ　ヤ　ナ

妻：ダカラ　ダアレモ　イラッシャラナイ。

4）は相手のいっていることに不服があり、少し冷たい態度で話すようなとき、「デス」がでてくるようである。

5．おわりに

本研究では、意識調査と実際の発話の両面から、夫婦の会話の特徴を見てきた。

夫婦の会話は、夫は妻にぞんざいに、妻は夫にそれほどぞんざいではなく話すものだと思われている。実際は、夫婦の間では、両者とも最も気楽な話し方をすることが多く、妻の発話の中には、美化語や話題の人物に対する敬語はあっても、夫に対する敬語はほとんどない。夫に対して敬語が使用されるとしたら、夫婦の会話を第三者が聞いていたり、風呂に入るか、食事をするかなどを毎日の生活の場で習慣的に聞くときなど、相手への敬意というよりは、自らを従順で働き者の妻として装うために使用しているものと思われる。

夫婦の会話は、トピックの変換が多く、日常生活の行動に付随した話題がどこにでも挿入される中を、日常的な雑談や世間話が次々と話されている。そこでの特徴は、呼称、二人称詞の多使用、話題の変換、相づちの少なさ、相手の発話の先取り、合作などを妻が行い、会話のリーダーシップを取っていることである。

男女の大学生の会話の研究では、会話の進行は男子学生が行い、本研究では、妻が会話の進行を行うことが多かった。男のことば、女のことばという範囲でこの事実を見ると、大きな矛盾になってしまう。比嘉の言う一定の人間関係による会話の分析の必要性がここで証明されている。

本研究では、意識と実際が大きく異っていることも明らかになった。夫婦の会話の実際の無標形（unmarked form）は丁寧語も何もないことばづかいであるが、妻が夫にいうことば、意識にのぼる典型的なものは、K妻のいうように丁寧語や尊敬語を含む形であることがある。このより丁寧な表現は、妻の役割を重視したときにでてくる、社会・文化的規則にのっとった表現で、妻のイメージを代表するものと言えよう。言語運用の調査をする場合、意識と実際の両面を忘れてはならないことがわかった。

本研究は、K夫妻のケーススタディーというのが実際である。資料は少なく、分析したものもほんの一部である。しかし、今後のさまざまな可能性が見えてきたように思う。

一定の人間関係の実際の発話の分析は、今までの面接やアンケート調査で代表される社会言語学の調査方法では得られなかった新しい事実を教えてくれる方法である。何組もの夫婦の調査をしていけば、日本の夫婦語の実態が明らかになっていき、それと外国のものとを比較することにより、夫婦という単位の中での言語の役割や機能、その普遍的なもの、一言語独自のものなどが明らかになっていくことは確かである。

コンピューターや KWIC を導入することは、資料分析を何十倍も迅速にする。また、敬語の出現率の算出、場面との相関など、今後資料の量をふやし、入力のしかたを工夫するとさまざまな研究が可能になりそうである。

《 注 》

1）本研究は、昭和57年度科学研究費補助金特定研究(1)「情報化社会における言語の標準化」第８班「女性の敬語の形式と機能」課題番号57115004における共同研究（井出祥子、堀素子、川崎晶子、生田少子、芳賀日登美）の一部を筆者が分析考察したものである。

2）「心的距離のパラメーター」として1981年５月、日本英文学会シンポジウム「日英語比較方法論」で「社会言語学における普遍と個別の待遇表現の比較方法」という発表の中で井出祥子が発表したもの。

3）相手の発話によって中断されるまでを１発話とした。

4）東京大学大型計算機センター利用。

5）東京大学言語学科大学院豊島正之氏作成のプログラム。

6）（　）内の数字は、前３ケタが場面番号、後ろ３ケタがトピック番号である。

《引用文献》

井出祥子　1979　「大学生の話しことばに見られる男女差異」　文部省科研費特定研定研究「言語」　ペング班中間報告

荻野綱男　1982　「敬語使用から見た聞き手の位置づけの多様性」　国語学会配布資料

Okuda, Akiko 1977.　"DESU MASU in Conversation — a case study of S." LSA Summer Institute, unpublished paper.

比嘉正範　1982　「会話構造の比較」『日英語比較構座　第5巻　文化と社会』大修館書店　pp. 83－106

An analysis of the interaction in husband-wife conversation

Akiko KAWASAKI

The purpose of this paper is to examine the characteristics of husband-wife conversation in Japanese.

Tape-recorded actual speech between Mr. and Mrs. K, and a questionnaire on their speech are analyzed according to the following points:

1. how they think they speak to each other
2. how they actually address each other
3. what they talk about
4. who initiates the conversation
5. how politely they speak

The analysis leads us to the following conclusions:

1. The wife thinks that she uses polite expressions to her husband, which is considered to be a typical behavior of an obedient Japanese wife.
2. In actual speech, the wife hardly uses performative and propositional honorifics to her husband.
3. Unlike ordinary male / female interaction, the wife initiates the conversation.